

状況的学習論の再検討

— ドレイファスのハイデガー解釈に注目して —

平田 仁胤

本稿では、レイヴとウェンガーによって主張された状況的学習論に内在する問題を、その思想的源流に位置づけられるM. ハイデガーの著作『存在と時間』から指摘した。状況的学習論は実践共同体への正統的周辺参加こそが学習であると主張するが、それは同時に、共同体の意味連関に回収されてしまう頽落でもある。共同体において可視化される実践テクノロジーに馴染み、アイデンティティを獲得することが、そのまま当該実践共同体の自明視につながり、反省を困難にしてしまうのである。

Keywords : ハイデガー, 実践共同体, 透明性, 意味連関, 頽落

1. はじめに

状況的学習論 (situated learning theory) と呼ばれる理論が、広く知られるようになって久しい。それは、これまで暗黙のうちに前提とされてきた、学習を個の作業や表象の操作に還元する理論枠組みを問い直し、学習の過程には状況 (situation) が必要不可欠の役割を果たしていることを指摘した。状況論の発展において中心的な役割を果たしたレイヴとウェンガーの『状況に埋め込まれた学習』を知らぬ者は少ないだろう¹⁾。

だが、この状況論の展開の背景に、ハイデガー (Martin Heidegger, 1889-1976) の前期思想があることは、あまり知られていない。彼の前期思想を代表する『存在と時間』は、西洋哲学に連綿と続いていた存在論を問いなおす試みとして著されており、たしかに一瞥した限りでは、状況的学習論と無関係のようにも思われる。しかし、『存在と時間』におけるハイデガーの議論は、ドレイファス (Hubert Dreyfus, 1929-) の積極的な受容により、状況論ひいては状況的学習論に多大な影響を及ぼしている。

かつての人工知能研究や認知科学において主流であった「古典的計算主義」(門脇／信原, 2002, p.3) を、徹底的に批判するために援用されたのが、他な

らぬハイデガーの『存在と時間』だったからである。詳細は後述するが、古典的計算主義の理論枠組みでは「フレーム問題」を避けられず、その解決方法について、ハイデガーの前期哲学が重要な示唆をもたらしたのである (ウィノグラード／フローレンス, 1989; 門脇, 2010; 門脇／信原, 2002; ドレイファス, 1992; ドレイファス／ドレイファス, 1987)。その後、古典的計算主義の理論枠組みが問い直されながら、人工知能研究や認知科学は状況論へとシフトしていったとされている (渡部, 2010, p.5)。

しかし、ハイデガーの『存在と時間』は、限定的なかたちでしか受容されていない。その受容はドレイファスの解釈に大きく方向づけられていたのだが、「私は第一部第一篇が、『存在と時間』の最も独創的で重要な部分だと今でもみなしている」(ドレイファス, 2000, 序文 p.5) とドレイファス自身が述べているように、その解釈は『存在と時間』の第一部第一篇を強調するものだった。しかも、限定的なのはそれだけではない。古典的計算主義への批判を行うドレイファスは、第一部第一篇の全体を視野に含むことなく、「世人」や「頽落」といった鍵概念について触れていないのである。

もちろん思想の受容と呼ばれる事態が、限定的なかたちで行われることは珍しくはない。また、思想

の全体的な受容というものがあるとすれば、それがどのような事態なのかについて、紙幅を割いた考察が必要になるだろう。とはいえ、ハイデガーが世人や頽落といった概念を用いて、現存在が共同存在であるがゆえに自己を本来的様態から遠ざけてしまうと指摘したことは、状況的学習論にとって看過されるべきではなかったと思われるのである。

状況的学習論は、他者とのインタラクションを理論的前提としているため、その重要性を主張するものの、それ自体が孕み持っている問題を指摘しない。ここで状況論の思想的背景となったハイデガーの『存在と時間』に立ち返ることによって、その問題が指摘できるとするならば、今一度、状況的学習論を再検討する必要があると考えられる。状況論の碩学である上野が、状況論の流れを整理したとき、ハイデガーの名を挙げていなかったことは指摘されてよいだろう。

本論文では、ドレイファスのハイデガー解釈に注目し、ハイデガーの『存在と時間』がどのように状況的学習論に受容されたのかを概観する。その作業を通じて、いかに彼の思想が限定的に理解されていたのかを確認し、最後に、状況的学習論がその理論的前提ゆえに抱えてしまう問題を、『存在と時間』の議論から指摘したい。

2. フレーム問題

まずは、古典的計算主義に基づく人工知能研究や認知科学が当時どのような問題を抱えており、それがドレイファスの解釈するところのハイデガーによって、いかに指摘されたのかを確認する。

ドレイファス（1992）は、当時の人工知能研究の流れを、1957年から1972年までの区間で捉える。その時期の人工知能研究は、いずれ人間の知的振る舞いをコンピュータにシミュレートさせることができるだろうという楽観論に支配されていたと総括する。しかし、次の四つの誤った前提を抱いているために、コンピュータが人間をシミュレートしたり、人間の知能を再現したりすることはできなかったという。

その四つの前提とは、以下の通りである。第一の前提として、脳の情報処理が、スイッチのオンやオフ状態に相当する生物学的状態を通じて行われる離散的な操作だとする「生物学的前提」があり、第二に、心を形式的操作にしたがって単位情報（ビット）を操作する装置とみなす「心理学的前提」がある。また第三として、すべての知識は形式化することが可能であるとする「認識論的前提」が挙げられ、そして第四の前提には、世界に関連するすべての情報、

知的振る舞いの算出にともなって本質的なものはすべて、原理的には状況に依存しない確定的要素の集合として分析可能であり、そのようにして存在する情報は互いに論理的に独立した事実の集合だと考える「存在論的前提」があると述べる（ドレイファス、1992, pp.275-276）。

ドレイファスによれば、これらの前提はすべて誤っているという。脳をデジタル・コンピュータに見立てることは可能でも、それは経験的仮説でしかなく、心を形式的操作に還元することもできないし、知識には形式化できないものが含まれている。そして、世界に関するすべての情報は、何らかのかたちで状況と関連しており、状況に依存しない世界は存在しないと述べる。

かりに、状況に依存しないかたちで世界に関する情報を分析し、それをプログラムしたとしてもロボットは機能しないという。なぜなら、人間はつねにすでに世界を構造化しており、その構造において対象とみなすものとそうでないものとを認識しているが、そのようなロボットは構造を認識できないからである。

たとえばロボットに「ノブを回せばドアが開く」といったプログラムに基づいて、ドアを開けさせようとするとしよう。そのさい「ノブを回してもドアが壊れない」ことや「ドアを開けても壁の色は変わらない」といった、あらゆる可能性を考慮しなければならない。そしてあらゆる可能性をプログラミングしようとしたら、今度は処理しきれないデータ群に悩まされることになる。あるいは、ドアを開ける必要がなくなるといった状況の変化に、このロボットは対応できない。

だが人間は、それらの可能性については、普通考慮しない。ドアを開けるという目的や関心にとって、そうした考慮が不要であることを知っているからである。つまり人間は、目的や関心によって世界を構造化し、その構造化された枠組みに沿って行動しているのだが、状況を捨象してしまえば、ロボットにその枠組みをプログラムできなくなってしまうのである。この枠組み＝フレームをどのようにして設定するのかというのが、古典的計算主義を悩ませたフレーム問題である。

このフレーム問題を指摘するにあたって、ドレイファスの依拠したのが、ハイデガーの『存在と時間』で展開されている議論である。ドレイファスが理解するところのハイデガーによれば、人間が住まう世界は、状況や文脈を離れた事物の離散的な集合などではなく、自らが精通している道具（Zeug）の意味連関のネットワークとして認知されているという。

たとえば、自動車の方向指示信号は、その形状や可視光線の波長といった特徴だけから理解されていない。それは、歩行者やドライバーにとって安全に移動するための道具であり、意味性を持っている。交通機関や交通規則という文脈全体のなかに位置づけられ、互いに意味連関のネットワークを形成しているのである（ドレイファス, 1992, pp.446-447）。

フレーム問題は、人間の認知が脱文脈的な要素を把握することによって成立しているのではなく、状況という意味連関に埋め込まれた道具的把握によって行われることを、逆説的にも明らかにした。人工知能研究や認知科学に古典的計算主義からの脱却を促し、新しい研究パラダイムに導く要因の一つとなったのが、ハイデガーの『存在と時間』なのである。ドレイファスの解釈に基づくハイデガーの議論、とりわけ人間の認知がすでにつねに意味連関において成立しているという議論は、状況的学習論に色濃く反映されている。

以下では、レイヴとウェンガー（Lave & Wenger, 1991）を中心に、その影響を必要な範囲内で確認する。

3. 状況に埋め込まれた学習

ここでは『状況に埋め込まれた学習』を、実践共同体（community of practice）、正統的周辺参加（legitimate peripheral participation）、透明性（transparency）、という概念に注目しながら読解する²。

レイヴとウェンガーは、実践共同体の具体例として、ユカタン半島のマヤ族の産婆、リベリアのヴァイ族とゴラ族の仕立屋、アメリカ海軍の操舵手の作業習得場面、アメリカのスーパーの肉屋、アルコール依存者たちを取り上げる。

リベリアの仕立屋の場合、徒弟はまず、帽子やズボン下、子ども服の作り方を学び、それから次第に、外出用のフォーマルな衣服や高級スーツを作ることを学んでいく。作業の場では、衣服を完成させるための全過程およびその完成品を観察することが可能であり、徒弟自身の仕事が、その過程においてどこに位置づけられるのかを理解できるようになっている。実践共同体がどのような実践を目指して組織されているのかを理解し、その中に自らの役割を見出すことができるという意味で、よく機能している事例として挙げられている。

反対に、スーパーの肉屋の事例は全過程のなかで自分が行っている仕事の位置関係が把握できないため、よく機能していない実践共同体として扱われて

いる。肉屋に就職するまえに、職業学校では包丁を研ぐ技術を教えられるのだが、すでに現場では包丁を定期的に廃棄・交換するため、その技術は不要となっている。にもかかわらず、職業学校のカリキュラムは見直されないまま、包丁の研ぎ方が教えられていたという。職業学校と肉屋の実践全体を見通せていないために、この問題が起きているという。また職業学校を卒業して現場に出たあとは、学習の機会がほとんどなく、自分に次ぐ新人が入社するまで、ひたすら機械で肉を梱包する作業に従事することになる。梱包用の肉が、職人の手によってどのように捌かれるのかを観察できないような環境構成になっているという。

これらの例から分かるように、実践共同体とは、衣服の生産といった特定の社会的活動を目的として組織された共同体を意味する。それは、会社の部署や学級といった、制度的に組織化された共同体とは異なる。端的に言えば、まず実践ありきで人々や人工物などが組織化されている共同体を指している。

もちろん、制度的な共同体もまた、特定の活動を達成するために組織化されることがあり、両者は必ずしも対立するわけではない。ときとして、制度的な共同体は実践共同体に属する人々に、活動を共有する場を提供することもある。しかし同時に、制度的な区分けによって実践が分断されてしまうこともある。いずれにせよ、実践共同体と制度的なそれが区別されていることを踏まえなければならない。

この実践共同体への参加は正統的周辺参加と呼ばれており、新参者の状態から十全参加（full participation）の状態へと移行しながら、共同体の成員としてのアイデンティティを獲得して成長することが学習だとされている。

すぐに注釈を行わなければならないが、レイヴとウェンガーの言う正統的周辺参加は、実践共同体の周辺部からその中心部へと、次第に重要な実践を担うようになることを必ずしも意味しない。あるいは非正統的な仕事から、徐々に正統的な仕事へと移っていくという話でもない。

正統的周辺参加は、中心と周辺あるいは正統と非正統といった領域区分を行うためではなく、「複数の、多様な、多くあるいは少なく関わったりつつみ込んだりする仕方」での参加を描き出すための概念であり、「関連する共同体の結節点」において、様々な成員たちが含まれている「関係の多様性」（Lave & Wenger, 1991, pp.35-37）に焦点を当てるための視座である。

『状況に埋め込まれた学習』におけるリベリアの仕立屋の例をアレンジするかたちで、このことを説

明しておきたい³。この実践共同体が共有している実践は衣服の生産である。そこには、手で縫う作業や、足踏みミシンを使うこと、裁断や縫製の仕方など、複数の多様な技術から成立している。それらの技術とそれを担う人々を包み込んだかたちで共同体が成立していると言っているだろう。

それらの技術を担う人々は、互いに関係しつつも関与しない状態にある。手で縫う作業に従事しているときは足踏みミシンの仕事には関わらない。また、手で縫う作業に携わっている人は手縫い作業に、他の仕事を進めている人はその仕事に、自らのアイデンティティを見出している。彼らはすべての実践に精通する必要はなく、「共同体の結節点」としての周辺の役割を十全に果たすことによって、衣服の生産という実践共同体を支えているのである。

レイヴとウェンガー自身が「徒弟制の概念を救済」(Lave & Wenger, 1991, p.29) することを謳っているためか、親方と徒弟との緊密なやりとりを前提にした、閉鎖的で変化の乏しい組織における、周辺から中心への学習過程を含んだものとして、実践共同体は連想されがちである⁴。だが、彼らが念頭に置いているのは「歴史的に構成され、常に進行し、コンフリクトをはらみ、共動的 (synergetic) な構造化している、実践者の間にある活動とその関係」(p.56) である。

実践共同体の成員が正統的周辺参加を果たすためには、その共同体が何を目的としているのか、他の成員たちがどのような仕事に携わっているのか、どのような情報や資源を利用しているのか、などを把握し、その意味連関に自らを位置づけることが必要になる。そのためには実践テクノロジーの透明性が確保されなければならないとレイヴとウェンガーは主張する。実践テクノロジーとは、実践共同体が作り出した、そこでの実践を支える人工物を指す。足踏みミシンのような具体物は言うに及ばず、フォーマルあるいはインフォーマルな作業用のマニュアルといったものまで含まれる。いずれにせよ、実践テクノロジーは、当該実践共同体に属さない人間にとっては用法の分からない人工物にすぎない。すなわち、実践テクノロジーが不透明なのである。レイヴとウェンガーは、この不透明な状態を「ブラックボックス」、反対に、そのテクノロジーの用途が分かる透明な状態を「ガラスボックス」という比喩で表現する。ブラックボックスからガラスボックスへの移行が、正統的周辺参加に必要なのだという。

レイヴとウェンガーの状況的学習論に、ドレイファスの解釈するところのハイデガーの影響を看取することは難しくない。人間は世界を、最小単位の

要素に還元されたデータの離散的集合として認知するのではなく、その関心にしたがって構築される意味連関のネットワークとして認知するとされていた。実践共同体において、そのテクノロジーがどのように配置されているのかを理解し、そこに正統的周辺参加を果たすということは、意味連関のネットワークを理解し、そこにコミットすることと解して間違いないだろう。意味連関にアクセスしやすいように実践テクノロジーの透明性が確保される必要があるという議論も、古典的計算主義が文脈や状況を捨象したデータの集合として知識を捉えたためにその「道具」としての役割が見えなくなってしまったという問題と、概念的に不即不離の関係にある。実践テクノロジーが不透明になってしまうのは、それがまさに文脈や状況への理解を欠いているがためであり、それに透明性をもたらすのは、実践共同体という意味連関に他ならないからである⁵。つまり、意味連関を与える場としての実践共同体という見立ては、ドレイファスの解釈によるハイデガー哲学の延長線上にあるのである。

だが、上述のように、ドレイファスの解釈を通じたハイデガー受容は、限定的なものに留まっている。『存在と時間』の一部分だけが注目され、意味連関のネットワークに必然的に伴う頽落という現存在の様態があることは指摘されていない。それは、実践共同体の成員としてのアイデンティティ形成であると捉えられており、いわば肯定的な評価がくだされていた。しかしハイデガー自身は、そこに否定的な側面を指摘し、綿密な議論を展開している。

以下では、『存在と時間』の世人や頽落に関連する議論を読みなおすことによって、状況的学習論が持つ問題点を明らかにする。

4. 共同存在としての現存在

ハイデガーによれば「現存在は本質上、共同存在である」(Heidegger, 2006, p.120) という。現存在の存在様態は、つねにすでに他者との関係性を含み込んでおり、どれほど他者から物理的に離れて生活していようとも、他者によそそしい態度をとっていても、行動や思考の準拠枠として他者のありようが配慮されている。ここで言う他者は、具体的に固有名を持った存在というよりも、「特に誰ということもできない中性的なもの、世人(*das Man*)である」(p.126)。世人との関係について、ハイデガーは次のように説明している。

私たちは、人もするように享樂や娛樂に興じ、人もするように文学や芸術を、読み、鑑賞し、批評

し、そしてまた、人もするように「大衆」から身をひき、人が「けしからぬ」と思うものを、けしからぬと思うのである。この人は——特定の人ではなく、総計ではない意味でのみんなであるが——日常性のあり方に指令を与えているのである。(Heidegger, 2006, p.126)

このように誰でもない誰かとしての世人に、自己のあり方を委ね、本来的な自己自身がまずさしあたって疎外されている状態を、ハイデガーは「頹落 (Verfallen)」(p.175) と呼ぶ。

ここで気をつけなければならないのは、現存在の本来的なありようが世人によって疎外されているといっても、世人を超越したところに本来的な自己があるという意味では、決してないことである。ハイデガー自身も述べるように、現存在はその現象学的様態から、さしあたり世人を準拠枠とするのであって、多かれ少なかれ、世人を無視することはできない。現存在は、さしあたってたいい、非本来的な自己のありようを存在しているのであって、その非本来的な自己の状態を変容させるかたちでのみ、本来的な自己に出会うことができる。この点において頹落には積極的な意味があると、ハイデガーは主張している。

ハイデガーは、現存在が本来的自己から疎遠になっている様態を、世間話 (Gerede)、好奇心 (Neugier)、曖昧さ (zweideutigkeit)、という現象から解明している。

世間話の性質として、それが確固とした根拠を持たないにもかかわらず、曖昧模糊としたまま拡大し、次第に権威的な性格を帯びるところにあるという。他者が話題にするというだけで、それが話題に値するものとなり、それが真実なのか虚偽なのかを検討することなく、一体誰がその話を支持しているのかも分からないまま、現存在に安心感をもたらす。

日常的な現存在は、また自身から疎遠になっている状態を隠蔽するために、新奇なものを忙しなく追い求め続けるともハイデガーは述べる。それは自らの無知を前提にして、真摯に未知の事柄を学ぶということではなく、世間話によって聞きかじったことを確認する気晴らしなのだという。

そうして事柄の真正な理解から遠ざかり、何が正しいのかについて曖昧な理解しか抱けなくなってしまう。誰もが「うすうす感じていること」(p.173) を、噂話にしたがってそのように語り、平均的な理解以上のことを求めない。むしろ、真正に新しいものが創造されるや否や、世間一般の理解に当てはめて、陳腐で通俗的なものに貶めてしまうのである。

これらのハイデガーの指摘は、『存在と時間』でこれまで展開してきた議論の延長に位置している。すなわち、他者をも含めた意味連関のネットワークとして世界が立ち現われるという、ドレイファスも注目した部分から導かれている。だとすれば、ハイデガーの『存在と時間』を思想的源流としている状況的学習論にも、同じことが指摘できるのではないだろうか。つまり、現存在が頹落しているように、実践共同体への正統的周辺参加にも、頹落が伴っているのではないか。

実践共同体において、何が目的になされているのか、どういった実践テクノロジーが利用されているのか、などはさしあたり参加者には立ち現われていない。その覆いを取り除き、当該共同体の意味連関のネットワークへの参入を促すのは、他ならぬ他者である。まずは他者との話によって、実践とそのテクノロジーの不透明性を取り除かなければならない。だが、その当初の段階において、他者の話が真実なのか虚偽なのかを検討することはできず、ひとまずは所与のものとして呑み込むしかない。そうして実践共同体に巻き込まれながら正統的周辺参加を果たすことによって、アイデンティティは獲得される。

また、実践共同体における周辺の役割は、それが周辺的であるがために実践のすべてではない。その意識が、自分の役割とは異なる仕事への好奇心につながることはあるだろう。そこで異なる仕事を確認し、疎遠になっている自己を隠蔽するかもしれない。実践共同体全体の意味関連のネットワークに即して自らの周辺の仕事を位置づけ直しながらも、そこに留まろうとすることは、まさにこの好奇心を満たす行為とは言えないだろうか。

さらに、当該の実践共同体において意味づけられない事柄、あるいはその実践そのものに疑義を呈するような事実の発見があったとしても、世間話によってその場に馴染み、好奇心によってたえず疎遠であることを糊塗してきた現存在が、その事実を配慮できなくなってしまう可能性も考えられるだろう。ある実践共同体がすでに不要とされているにもかかわらず、成員たちが実践に埋め込まれているがために、その事実気づけないといったことはないだろうか。

ここで指摘した状況的学習論に頹落が生じているとする私の主張は、当然ながら、解釈の一つでしかない。状況的学習論を過度に単純化し、不当に貶めているという批判もあるだろう。

だがここで、状況的学習論に意味連関のネットワークという視座をもたらしたドレイファスが、自

らの議論に頹落の可能性を認め、古典的計算主義への批判から除外していたとすればどうだろうか。実践共同体における正統的周辺参加それ自体に、頹落の契機があることを、他ならぬドレイファスが気づいていたのだとすれば、意味連関のネットワークには、つねにすでに頹落という現象が伴わざるを得ないことになるのではないか。

5. 世人あるいは透明性をめぐる両義性

(1) 順応性と順応主義

ドレイファスは、『存在と時間』に対する仔細な注釈を付しているが、ハイデガーの世人について次のように述べている。

残念ながらハイデガーは、この構成的な順応性 (conformity) と有害な順応主義 (conformism) とを区別しなかった。それどころかハイデガーは、『現代の批判』におけるキルケゴールの大衆攻撃に感化され、この重要な区別をばやけさせてしまうのにどんどん手を貸してしまう。(ドレイファス, 2000, p.176)

ハイデガーに対するキルケゴールの影響について検討する余裕はないが、ここでドレイファスが、ハイデガーの選択的受容を試みているのは明らかであろう⁶。ドレイファスによれば、世人の構成的な順応性の面と、有害な順応主義の面とをハイデガーは区別しなかったという。そしてドレイファスは、ウィトゲンシュタインにも言及しながら、世人の構成的な順応性へと考察を進める。

最も単純で基礎的なものを説明するとき、最後には「人はそうするものだ」と言うしかない。(ドレイファス, 2000, p.176)

世界の理解可能性の源泉は平均的な公共的振る舞いであり……共有されているのは概念枠、つまり、顕在化され正当化されるような信念システムではない。……全面的な明晰性や究極的理解可能性といった哲学的理念とはまったく正反対のものである。(ドレイファス, 2000, p.177)

この引用文には、ドレイファスが人工知能批判を開始した頃から一貫している問題意識が現れている。「全面的な明晰性や究極的理解可能性」という「哲学的理念」への批判は、古典的計算主義に立脚する認知科学が前提としていた知識観と同型であるからだ。すなわち、すべての知識は形式化され、離散的

集合のデータ群に分析されるはずであり、それらをコンピュータに入力することによって人間の知能は再現可能であるはずだ、という知識観である。

さて、ドレイファスの議論は、世人との関係性によって生じる頹落を「有害な順応主義」として位置づけ、ハイデガーの議論から「構成的な順応性」、すなわち世界がどのように立ち現れるのかの分析と分けようとしている⁷。ドレイファスによれば、世界は道具の意味連関のネットワークとして立ち現れる。ハンマーは釘を打つため、タイプライターは文章作成のための道具として認識されるのだが、それはデカルト的な自我による意味付与の産物などでは決してない。世人が、ハンマーやタイプライターをまさにそのように使用するからであり、それを現存在が共有しているからである。そうして世人の使用方法を共有することで、その用法に規範性や適切性が備わるのだとドレイファスは主張する (2000, p.173)。言い換えれば、世人が現存在の日常的了解の基盤となり、私たちの生活を支えているのである。

この世人の構成的な順応性は、まさにドレイファスが意味連関のネットワークとして指摘したものであり、レイヴやウェンガーが主張する状況的学習論が前提としていた考え方でもある。

だが、ドレイファス自身が「区別」という言葉を用いていることから明らかなように、この順応性は、世人という同じ現象の片面であり、もう一つの順応主義とは表裏一体の関係にある。順応性と順応主義は、概念上は区別可能であっても、世人という根を同じくしている。つまり、状況的学習論はその思想的源泉をハイデガーに負っているため、順応性と順応主義の両義性をも受け継いでいると考えられるのである。

(2) 可視化と不可視化の弁証法

ここでレイヴとウェンガーの議論に立ち返ろう。実践共同体がどのような実践のために組織され、実践テクノロジーが配置されているのか。その実践全体のなかで、自分がどこに立ち位置を持ち、何をすればよいのかを踏まえ、その実践への十全的参加を果たす。それによって実践共同体でのアイデンティティを獲得する過程それ自体が学習である、というのが彼らの主張であった。

もちろんこの過程は、レイヴやウェンガー自身も注意を促しているように、単に学習者が、周辺から中心へと向かうものではない。またその学習は、様々な実践共同体と複雑に関係し合い、調和を保ちつつコンフリクトを起こし続ける動的なものである。しかし、この正統的周辺参加の過程には、世人と頹落が結びついていたように、順応主義が不即不離のか

たちで共存している。

レイヴとウェンガーの「透明性」という鍵概念に注目して、この不即不離の共存関係を確認しておきたい。彼らによれば、実践共同体へのアクセス可能性、すなわち、そこへの正統的周辺参加を可能にするのは、共同体で用いられている実践テクノロジーの可視性だった。たとえば、足踏みミシンが何のために使われるのか分からなければ、それを利用する実践の意味も、その意味が位置づけられる実践共同体の目的も分からず正統的周辺参加を果たすことができない。だからこそレイヴとウェンガーは、実践テクノロジーを不透明な状態から透明な状態にすること、すなわち可視化が必要であると主張していた。

だが、用いられている実践テクノロジーをすべて可視化すればよい、という単純な話ではない。透明性は不透明性を伴い、逆もまた然りであるからだ。両者は弁証法的な関係にある。

媒介するテクノロジーの不可視性は、対象に焦点を当てるために、それを可視化することを支えるために必要である。対照的に、テクノロジーの意義の可視性は、それが問題を生じない——つまり不可視的な——利用を可能にするために必要なのである。このようなコンフリクトと共働の相互作用は実践における学習すべての面で中心的である。(Lave & Wenger, 1991, p.103)

レイヴとウェンガーの指摘は、メガネをたとえ話にすると分かりやすい。メガネをかけることで私たちは、視力を矯正し対象に焦点を当てることできるようになる。このときメガネによって対象が可視化されている。しかし同時に、メガネをかけていることそれ自体は、対象に焦点をあて、ぼやけることなく視界に捉えている限りでは意識されない。メガネという実践テクノロジーを利用していること自体は不可視化されているのである。もしメガネが、目元から滑り落ちてしまったりした場合、これまで難なく捉えていた対象に焦点が合わなくなり、途端にメガネを利用していたことが自覚される。対象が不可視化することによって、メガネの存在が可視的になるのである。このように可視性と不可視性は「コンフリクトと協働の相互作用」の関係にある。

レイヴとウェンガーは、この可視性と不可視性との「よいバランス」(p.103)を保つように、実践テクノロジーを配置していく必要があると指摘する。だが彼らの議論は、当人たちの想定している射程に留まらない。なぜなら、実践テクノロジーの可視性／不可視性は、それが組み込まれている実践共同体

そのものの可視性／不可視性へとつながっているからだ⁸。

実践共同体への正統的周辺参加は、そこで用いられている実践テクノロジーが可視的であることが前提条件であった。レイヴとウェンガーは声高に指摘していないが、テクノロジーの可視化は、そこで実践する人々との相互作用によって構成される。テクノロジーとそれを取り巻く人々との共働やコンフリクトを生じさせながら、実践共同体の構成員として、次第に馴染んでいく。

この正統的周辺参加が、ある程度達成されるようになれば、そこには可視的な領域が広がるとともに、不可視化されたものが共存するようになる。リベリアの仕立屋としてその実践に参加しようとすることは、衣服を完成させる全工程を観察し、自らの立ち位置やアイデンティティを構築してゆく学習である。だが、このことは、仕立屋以外の仕事について注意を向けなくなることと同義である。なぜ仕立屋の仕事に従事すべきなのか、それがどのような役割を果たしているのか。これらのことは同時に不可視化されてしまう。

実践共同体における正統的周辺参加が——世人との関係における頹落のように——順応性と順応主義の両義性を備えていることは明らかだろう。正統的周辺参加は、その実践テクノロジーの不透明性を取り除き、その共同体における実践を共有し、そして成員としてのアイデンティティを獲得していくことであった。それは同時に、別のテクノロジーとそれに携わる実践共同体を不可視化し、当該共同体の実践へと埋め込まれることによって反省を行いにくくなり、それに対する批判的態度を難しくしてしまう。実践共同体の成員というアイデンティティの獲得が、実践共同体それ自体を不問に付す態度を伴ってしまうからである。

これが、レイヴとウェンガーの状況的学習論に内在しつづけながら、そして、ハイデガー自身が世人や頹落という鍵概念で明らかにしていたにもかかわらず、ドレイファスの解釈を経由したために提起されなかった問題である。

6. おわりに

ハイデガーは『存在と時間』の第二篇において、良心の呼び声(Ruf)の重要性を指摘している。それは、現存在が本来的に頹落しているがゆえに、そこから本来的自己を取り戻すために聞こえるのだという。それは具体的な天啓のように指示を与えないが、これまで配慮してこなかった意味連関のネットワークの不気味さへと目を向けさせるという。

ここで良心概念を精査する紙幅はないが、ハイデガーはこの概念に仮託することによって、現存在が頹落しているがゆえに頹落を突破する契機を見出そうとしている。それは従来の意味連関からの脱却と同義であり、実践共同体における意味連関のネットワークから距離をとり、そこで構築されたアイデンティティを問い直すことの重要性を示唆していると思われる。

今後は、実践共同体への正統的周辺参加を果たしつつ、そこからどのようにして離反できるのかを検討することが必要になるが、『存在と時間』の第二編の読解と併せて、今後の研究課題としたい。

引用・参考文献

以下の原典からの引用については、和訳を参照しつつ訳出を行っている。

Wenger, E., 1990, *Toward a Theory of Cultural Transparency: elements of a social discourse of the visible and the invisible*, California: Institute for Research on Learning.

Lave, J. & Wenger, E., 1991, *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation*, Cambridge: Cambridge University Press. (レイヴ, J. / ウェンガー, E., 1993, 佐伯胖訳 / 福島真人解説『状況に埋め込まれた学習：正統的周辺参加』産業図書)

Hanks, W., 1991, "Foreword by William F. Hanks", Lave, J. & Wenger, E., *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation*, Cambridge: Cambridge University Press, pp.13-24. (ハンクス, W., 1993, 「ウィリアムハンクスの序文」レイヴ, J. / ウェンガー, E., 佐伯胖訳 / 福島真人解説『状況に埋め込まれた学習：正統的周辺参加』産業図書, 5-20頁)

Heidegger, M., 2006, *Sein und Zeit*, Tübingen: Max Niemeyer Verlag. (ハイデッガー, M., 1994, 細谷貞雄訳『存在と時間』上・下, ちくま学芸文庫)

秋富克哉 / 安部浩 / 古荘真敬 / 森一郎編, 2014, 『ハイデガー読本』法政大学出版局。

石原孝二, 2002, 「認知科学における状況論的アプローチとハイデガー：ドレイファスのハイデガー解釈の射程」北海道哲学会『哲学年報』第49号, 17-30頁

伊藤崇 / 藤本愉 / 川俣智路 / 鹿嶋桃子 / 山口雄 / 保坂和貴 / 城間祥子 / 佐藤公浩, 2004, 「状況論的学習観における「文化的透明性」概念について：

Wenger の学位論文とそこから示唆されること」『北海道大学大学院教育学研究科紀要』第93号, 81-157頁。

ウィノグラード, T. / フローレス, F., 1989, 平賀譲訳『コンピュータと認知を理解する：人工知能の限界と新しい設計理念』産業図書。

上野直樹, 2010, 「ネットワークとしての状況論」上野直樹 / ソーヤーりえこ編著『文化と状況的学習：実践, 言語, 人工物へのアクセスのデザイン』凡人社, 3-40頁。

上野直樹編著, 2001, 『状況のインタフェース』金子書房。

ウェンガー, E. / マクダーモット, R. / スナイダー, W., 2002, 野村恭彦監修, 野中郁次郎解説, 櫻井祐子訳『コミュニティ・オブ・プラクティス：ナレッジ社会の新たな知識形態の実践』翔泳社。

門脇俊介, 2010, 『破壊と構築：ハイデガー哲学の二つの位相』東京大学出版会。

門脇俊介 / 信原幸弘編, 2002, 『ハイデガーと認知科学』産業図書。

佐伯胖監修 / 渡部信一編『「学び」の認知科学事典』大修館書店。

サッチマン, L., 1999, 佐伯胖監訳, 上野直樹 / 水川喜文 / 鈴木栄幸訳『プランと状況的行為：人間-機械コミュニケーションの可能性』産業図書。

田中智志, 2015, 「存在に向かう思考：ハイデガーの『学び』」東京大学大学院教育学研究科基礎教育学研究室『研究室紀要』第41号, 49-66頁。

ドレイファス, H., 1992, 黒崎政男 / 村若修訳『コンピュータには何ができないか：哲学的人工知能批判』産業図書。

ドレイファス, H., 2000, 門脇俊介監訳, 榊原哲也 / 貫成人 / 森一郎 / 轟孝夫訳, 『世界内存在：『存在と時間』における日常生の解釈学』産業図書。

ドレイファス, H. / ドレイファス, S., 1987, 棕田直子訳『純粹人工知能批判：コンピュータは思考を獲得できるか』アスキー出版。

福島真人, 2001, 『暗黙知の解剖：認知と社会のインターフェイス』金子書房。

福島真人, 2010, 『学習の生態学：リスク・実験・高信頼性』東京大学出版会。

レイヴ, J., 1995, 無藤隆 / 山下清美 / 中野茂 / 中村美代子訳『日常生活の認知行動：ひとは日常生活でどう計算し, 実践するか』新曜社。

渡部信一, 2010, 「『学び』探求の俯瞰図」佐伯胖監修 / 渡部信一編『「学び」の認知科学事典』大修館書店, 3-18頁。

¹ 上野（2010）によれば、レイヴとウェンガーの他に、サッチマンの『プランと状況的行為』もまた中心的な役割を果たしたという。サッチマンの研究は、エスノメソドロジーや人工知能研究あるいは認知科学を理論的背景に持つとされている。

² レイヴとウェンガー自身は、透明性をあまり強調しないが、ウェンガーの学位論文（Wenger, 1990）では透明性に関する議論に紙幅が割かれており、それらの成果が『状況に埋め込まれた学習』では踏まえられている。よって、本論文でもこの概念に注目した。

³ この点は、ウェンガーの学位論文における議論を踏まえると明確になる。ウェンガーは、一年間、アメリカの保険会社でのフィールドワークを行い、そこで保険の処理係として窓口対応に携わる従業員たちが、どのように自らの仕事を理解し、実践に携わっているのかを論じた。従業員たちは、必ずしも保険会社で重要なポストに就こうとするわけではなく、また、他の係の業務を積極的に理解しようとしていたわけでもない。処理係を遂行するうえで必要な事柄にのみ精通していたという。

⁴ 福島がギアーツを引きながら指摘しているように、徒弟制を理念的なモデル（model for）として扱っていることに、その誤解の原因の一つがあるだろう（2010, pp.95-95）。

⁵ ここでの議論は知識の転移に対する批判になっている。脱文脈的な知識が、他の具体的な場面において応用可能であるという想定は、文脈や状況を欠いた（あるいは払拭した）知識の有効性を前提にしているからである。ハンクスが『状況に埋め込まれた学習』のまえがきで述べているように、

状況に埋め込まれた学習は、「知識が持ち運べる（portable）ということが何を意味しているのかについて再考することへと導く」（Hanks, 1991, p.20）。レイヴとウェンガーも「持ち運べる」という言葉で、知識の転移について言及しているが、踏み込んだ議論を展開してはいない。ただし、脱文脈的な知識は転移可能だという考え方に、レイヴ（1995）が激しい批判を加えていたことには注意するべきだろう。

⁶ ドレイファスのハイデガー解釈については、その妥当性について議論がある。たとえば石原は、「ドレイファスのハイデガー解釈は穏当なものとは言い難い」と指摘している（2002, p.24）。またドレイファスの『存在と時間』への注釈書を監訳した門脇は、ドレイファスの戦略が、一方でハイデガーを正確に読み解こうとしつつ、他方で同時に、独自の解釈を施そうとしているという。

⁷ 田中（2015）は、ハイデガーの共同存在の議論を、人間が他者へのケアを本質的な特徴としているという文脈で用いている。ドレイファスとは異なるが、田中の議論もまた、その肯定的側面を捉えようとしていると位置づけられるだろう。

⁸ ウェンガー（Wenger, 1990）は、この点を学位論文においては明確に意識している。保険の配給額を査定するために用いられる「調整シート」という実践テクノロジーがあるのだが、その計算手続きが生まれた背景については、古株の人間ですら知らなかったという。